

「ティワット」

今、この幻想世界にかつてない
厄災が訪れたのです

オオオオオ

各地で突如都市を襲撃し
始めたヒルチャールの群れ

狂暴化した彼らに
次々と陥落していく
町や村々
その牙はついに――

ここ、モンドにまで
及んだのでした

エウリアを始め
偵察部隊を失った
西風騎士団は、
まともな斥候を
出すこともできず

ヒルチャール達の
奇襲を許すことにな
ってしまったのです

「はあ……はあ……」

「っ……強い……」

組織的な動きに翻弄され
消耗した所に攻撃を
受けてしまい

ついに私は、地面に
倒れてしまいました

ヒルチャール達が何故
こんなに強くなっ
ているの……?

それだけじゃない……
元素に対して……
耐性ができている……?

考えを巡らせる
私をヒルチャールたちが
取り囲み……

まるで仕留めた獲物に
群がるように
襲い掛かって
きたのでした



ヒルチャール達が私の服を乱暴に破り始める

「女……」

「……！」



「あつ、痛あ……っ！」

「やめなさい……っ!!」

彼らは敗れた服の
隙間から出た
肌を乱暴に触り
揉み始める……

この行為から
始まる答え……
それは――

【生殖行動】

ぬるん

「ひびく」



「ため」!!

「ダメです！」

「私はまた……!!」

三千年という
時を経て尚
守り続けてきた
場所…

こんな形で
失うわけには……!!

「ダメ……」

ダメええっ!!



「あ……あ……ああ……
そんな……」

彼らの生殖器が
私臆内を
容赦なく貫き

私は生まれて初めて
味わう痛みに
苦悶の声を上げました

痛いっ…痛いっ!!



ヒルチャールたちは私を抑え込み嫌がる私のアソコに生殖器を打ち付けて

激しく、そして乱暴に……

“あ”ああつ
抜いてえええつ!!

「抜いてくださいっ！」

そして――

だんだん早くなって

まさか……!?

気づいた私は
必死に逃れようと
抵抗しましたが

何人もの
ヒルチャールが
私を押さえつけ…

彼らの欲望が
私の子宮の奥に
吐き出されたのです

彼らの子種は
子宮の中の「女」を
目覚めさせる

子種は激しく
子宮壁を叩き

同時に汚れた元素が
私の膣を焼く

流れ込んでくる
ヒルチャールの子種

「あっ…いやっ…あああっ!!!」

二人、二人…次々と
私の子宮に注がれる
ヒルチャールの子種

膣内に吐き出される度に
子宮が…体が…
熱くなって…っ！

く…くる…っ
何か…来て…
しま…うう…っ！！

あ…ん…
あ…ん…

ん…

ん…

ん…

ん…

絶頂

女として生まれて
初めての経験

「あっ…あ…あああ…っ！！」

抗えない感覚に
私は恐怖しました

でも…悲しんでる
余裕もなく…

いつの間にか私を
取り囲んでる
ヒルチャールは
数十体になって
いたのです

は…は…

ダメ…こんなの
おかしく
なっちゃいます…

「いやっ、もうやめ……うぶっ!!」

取り囲まれた私は
手、口、お尻そして
お尻を塞がれ

絶頂を迎えた者から
射精を始める

それは「麒麟」に
とっての急所

「あ……え……っ!!」

感覚器官である
角にも浴びせられ

「んぶっ……あ……あ……あ……」

「ダメ……また昇ってきて……」

あ……う……あ……
「あ……あ……あ……っ!!」

吐き出される
子種が私の全身を
汚す度に迎える絶頂

その数だけ
私を快楽の底へ
墮とそうとしてきました

堪らず悲鳴を上げ
無様に達して
しまいました

「アッ……アッ……!!」

「もう、かけないでええっ!!」

「ああ……っ
お願い……します
もう……犯さない……でえっ……」

「あぐっやあつ……」

「いっやああああつ!!
また膣内に……っ!!」

「ああ……っ
やめてください……っ
これ以上膣内はあつ!!」

「あああつ角も……
角に掛けるのも
やめてええっ!!」

懇願すればするほど
彼らの嗜虐心を煽り

汚れた欲望を
吐き出して来るのです

何度も

何度も

内と外……
絶え間なく
吐き出される子種は

私を快楽の底へと
墮としていったの
でした

どれほど時間が経過したのか

建物は焼かれ

未だ犯されている
人々の声が
鳴り響く中

子宮はヒルチャールたちの
吐き出した子種で
穢し尽され

アソコ感覚が
なくなるほど
犯された私は
反応する体力も
なくなっていました

私を犯している
ヒルチャールは
別の獲物を探しに
少しずつ数を減らし
始めた頃

しばらくして
大きな足音が
耳元まで近づいて
きたのです

意識が朦朧と
している私を
何かが拘束し
始める……

「ぐ……うあ……」

見たこともない
怪物のような洋装の
ヒルチャール……

その巨体は
荒い呼吸をしながら
私を持ち上げました

——触手が私の全身を
まさぐり始める……

何本かの触手が
膣内に入り込み
膣の奥で蠢いているのが
感じられました

「お……っ」

丸くて硬いものが
私の子宮口を叩く——

触手は子宮の奥にある
卵巣に絡みつくと
どす黒い元素を
流し込んできたのです

「……あつ」

「う……あ……ああ……」

徐々に汚染されていく
「麒麟」の元素

そして子宮の中に
落とし込まれたものを
狙い澄ますように包み込む
それは——

私の「神の目」——

息を荒くした
巨大なヒルチャール

「フ……ッ……」

「フ……ッ……」

不気味な笑みを
仮面越しに
浮かべ

「オ……が……す……」

私をゆっくりと
自らの腰に
降ろし始めるのでした

「ソコ」は本来
命を育むための
場所……

誰にも
侵入を許したことがない
秘所である子宮へと
何かが落とされました

子宮口を触手が
こじ開け、入ってくる……